

# 平成26年度沖縄群島病害虫発生予報第7号(10月予報)

## I 10月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	70	40	20
平 年 並	20	40	40
低い(少ない)	10	20	40

(平成26年9月18日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	25.2	27.9	23.1	152.9	169.6

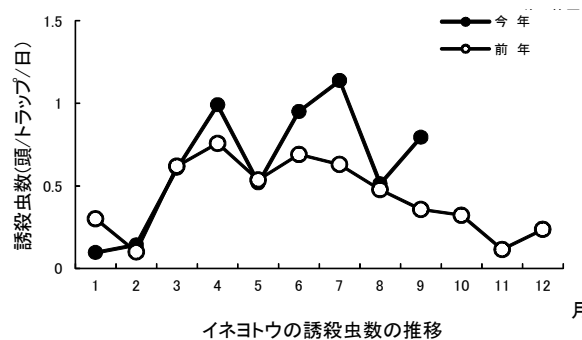
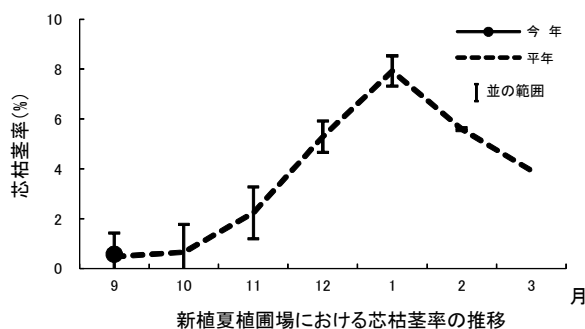
(沖縄気象台発表・統計期間1981~2010・資料年数30年)

## II 10月の発生予報および防除上の注意事項

### 1 さとうきび

#### ○ イネヨトウの防除対策

- 9月下旬の調査の結果、新植夏植圃場における芯枯茎率は0.6%(前年1.3%、平年0.5%)と平年並であった。
- 9月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.8頭(前年0.4頭)であった。



#### <防除上注意すべき事項>

- ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- 植付け時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- 平成26年度病害虫発生予報第6号(平成26年8月28日付)コラム参照。

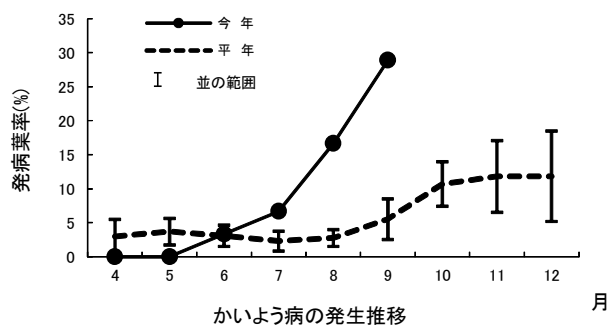
## 2 タンカン

### (1) かいよう病

発生程度 : 多

予報の根拠

9月下旬の調査の結果、発病葉率は28.9%（前年6.7%、平年5.5%）と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。

b 台風通過前に薬剤防除を行うと効果的である。

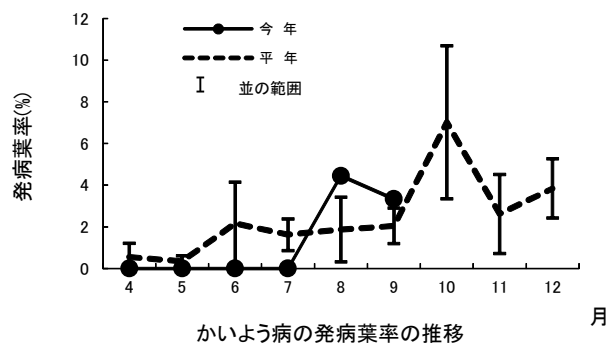
## 3 温州みかん

### (1) かいよう病

発生程度 : やや多

予報の根拠

9月下旬の調査の結果、発病葉率は3.3%（前年4.4%、平年2.0%）と平年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。

b 台風通過前に薬剤防除を行うと効果的である。

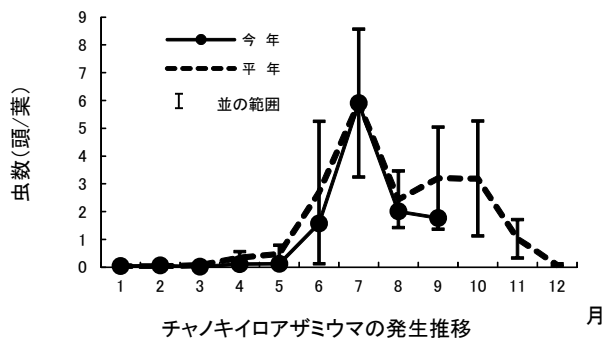
## 4 マンゴー

### (1) チャノキイロアザミウマ

発生程度 : 並

予報の根拠

9月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は1.8頭(前年8.0頭、平年3.2頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 収穫期に発生の多かった施設では薬剤による防除に努める。
- 剪定後の新梢の発生が早い施設では、本種の発生時期が早くなることから、新梢をよく観察し、初期防除に努める。
- 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

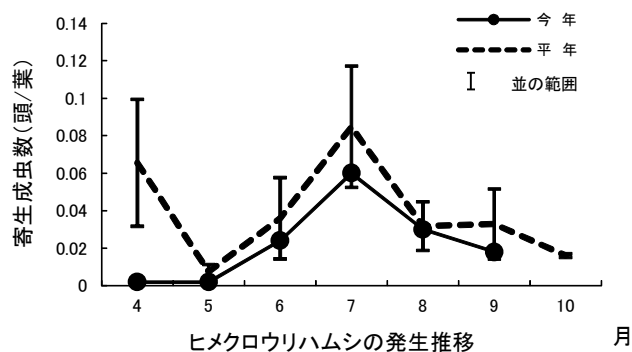
## 5 へちま

### (1) ヒメクロウリハムシ

発生程度 : 並

予報の根拠

9月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭未満(前年0.1頭未満、平年0.1頭未満)と平年並であった。

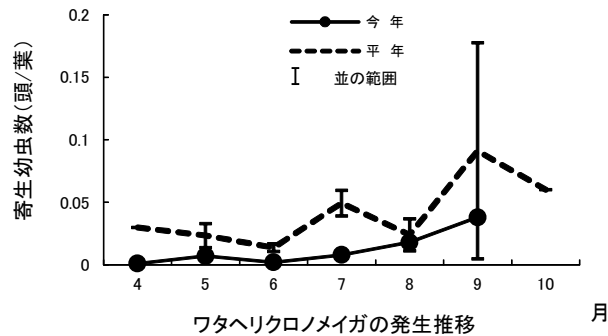


<防除上注意すべき事項>

- シルバーテープなど光反射資材を利用し、成虫の飛来防止に努める。
- 圃場内外のウリ科雑草は発生源になることから、根も含めて除去する。
- 産卵防止のため、地際部をシートなどで覆う。
- 動きの鈍い午前中に成虫を捕殺する。

(2) ワタヘリクロノメイガ  
発生程度：並  
予報の根拠

9月中旬の調査の結果、葉当たり幼虫数は0.1頭未満(前年0.1頭未満、平年0.1頭未満)と平年並であった。

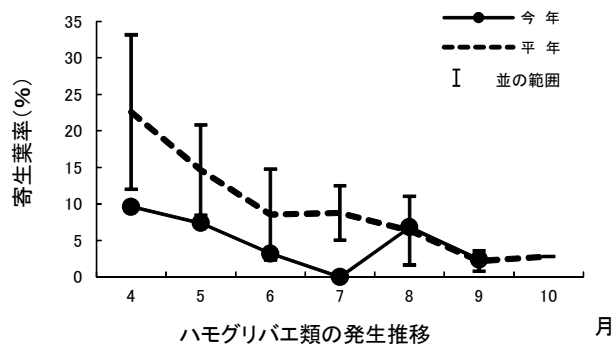


<防除上注意すべき事項>

- a 老熟幼虫は巻葉内において薬効が低いので、若齢期の防除が望ましい。
- b 殺虫剤は、若齢虫が生息する葉裏に掛け残しがないよう丁寧に散布する。

(3) ハモグリバエ類  
発生程度：並  
予報の根拠

9月中旬の調査の結果、寄生葉率は2.4%(前年0%、平年2.2%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 圃場内外のウリ科・ナス科・マメ科などの雑草は発生源になることから、除去する。
- b 幼虫期間が比較的短いため、葉の表面に産卵痕や食害痕がみられたら防除を開始する。
- c 農薬やその他の防除資材の効果の判定は幼虫の体色で判定する。生存時の幼虫の体色は黄色で、死亡すると黒変する。

## 6 きゅうり(施設)

○ 褐斑病の防除対策

- a 9月中旬の調査の結果、発病葉率は16.0%(前年4.0%、平年4.3%)と平年より高かった。
- b 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- c 下葉の老葉を早めに除去し、圃場外に持ち出し処分する。
- d 薬剤耐性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

## 7 にがうり(施設)

○ 斑点病の防除対策

- a 9月中旬の調査の結果、発病葉率は13.0%(前年0%、平年8.6%)と平年並であった。
- b 老葉や病葉は発生源になるので除去し、圃場外に持ち出して処分する。
- c 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- d 中～下位葉をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。

- ワタヘリクロノメイガの防除対策
  - a 9月中旬の調査の結果、寄生虫数は0.01頭未満(前年0頭、平年0.01頭未満)と平年並であった。
  - b 幼虫は葉だけでなく果実やつるを食害するため被害が大きくなる。
  - c 老熟幼虫は巻葉や果実内に隠れて防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
  - d 殺虫剤は、若齢幼虫が生育する葉裏に掛け残しが無いよう丁寧に散布する。
  - e 施設出入口は防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。

## 8 トマト(施設)

- タバココナジラミの防除対策
  - a 9月中旬の調査の結果、定植直後の圃場において発生が確認された。
  - b 本種はトマト黄化葉巻病を媒介する。
  - c 多くの雑草が発生源となりうるので、施設内外の雑草除去に努める。
  - d 施設開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
  - e 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
  - f 幼虫は下位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。
  - g 薬剤散布の際にはマルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。
  - h 平成26年度病害虫発生予察第7号(平成26年9月29日付)コラム参照。

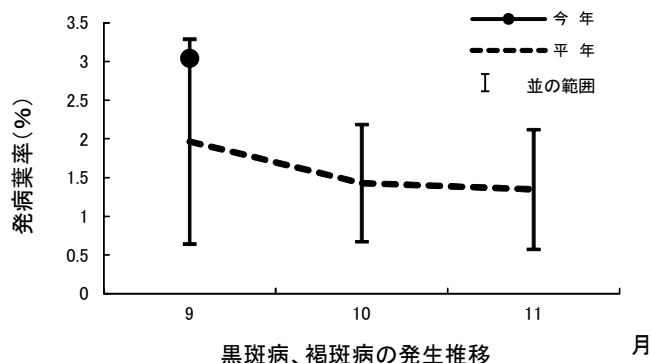
## 9 小ギク

### (1) 黒斑病、褐斑病

発生程度：並

予報の根拠

- a 9月下旬の調査の結果、被害葉率は3.1%(前年0%、平年2.0%)と平年並であった。
- b 一部圃場で多発生が見られた。



<防除上注意すべき事項>

- a 発病葉や摘葉等による残渣は発生源となるため、ビニール袋などに入れるなどして早めに圃場外に持ち出し処分する。
- b 除草などにより、圃場の通風をよくする。
- c 水滴の跳ね上がりを防止するため、敷草を行う。

### ○ チョウ目幼虫の防除対策

- a 9月中旬の調査の結果、一部圃場でタマナヤガの幼虫による生長点や葉の食害がみられた。
- b この時期からハスモンヨトウ、オオタバコガなどの発生も増加する。
- c 発生源となる、圃場周辺の雑草を除去する。
- d 圃場をよく観察し、早期発見、早期防除に努める。
- e ハスモンヨトウやオオタバコガは薬剤抵抗性を発達させやすいので同系統薬剤の連用を避ける。